

『淮南萬畢術』拾遺（六）

有馬 卓也

10 『淮南子』

『淮南内』とも称される本書は、『淮南萬畢術』の選者である劉安が編した主著であり、本書については多言を要しないであろう。『淮南子』中に『萬畢』との重複が存することは、既に金谷治氏（『老莊の世界―『淮南子』の思想―』第一部第二章2（平楽寺書店、1959）。後に『淮南子の思想』（講談社学術文庫、1992）や楠山春樹氏（『淮南中篇と淮南萬畢』、秋月観瑛『道教と宗教文化』（平河出版社、1987）所収。後に楠山春樹『道家思想と道教』（平河出版社、1992）も言及済みであるが、それぞれ数十条を提示するにとどめる。

本稿では『淮南子』の配列に従って、『萬畢』の内容に近似する六五条を提示する。ちなみに篇ごとの条数は以下の通りである。

倣真	1	天文	10	墜形	6	時則	5	覽冥	10
繆称	1	汎論	12	説山	11	説林	9		

なお、必要に応じて高誘・許慎の注も【補】において提示する。

既に拙稿『『淮南萬畢術』研究序説』（東洋古典学研究40、2015）で言及したように、『萬畢』に施された注は高誘によるものであるとする

説もある（たとえば張守節『史記正義』・李時珍『本草綱目』・方以智『物理小識』など）からに他ならない。

本稿では繆称訓までの三三条を提示する。

【一】

【原文】

昔、公牛哀、軫病^①也、七日化爲虎。其兄掩戸而入覘之、則虎搏而殺之。是故文章成獸、爪牙移易、志與心變、神與形化。方其爲虎也、不知其嘗爲人也。方其爲人也、不知其且爲虎也。（倣真訓）

【書き下し】

昔、公牛哀、軫病^①するや、七日にして化して虎と爲る。其の兄戸を掩^ひきて入りて之を覘^{のぞ}へば、則ち虎搏^{つか}ちて之を殺す。是が故に文章獸と成り、爪牙移易し、志と心と変じ、神と形と化す。方に其の虎たるや、其の嘗て人たるを知らざるなり。方に其の人たるや、其の且に虎たるを知らざるなり。

【注】

① 高誘注に従って「易病（変化する病）」として解しておく。

【現代語訳】

昔、牛哀は変化する病となり、七日後に虎に変化した。彼の兄が扉を開いて部屋に入って様子をうかがうと、（もと牛哀の）虎は兄を打ち殺してしまった。このようにして（牛哀は）体に（虎の）文様が浮かび、爪や牙は生え変わり、志気は心と共に変化し、精神も肉体とともに変化してしまった。（虎となった牛哀は）かつて自分が人間だったことはもうわからなかった。また人であった時には、自分が虎であることがわからなかった。

【補】

○ 高誘注に「軫病は易病なり。江淮の間、公牛氏易病ありて、化して虎と為る。中国の狂疾ある者は、発作の時にあるがごときなり。其の虎と為る者は、便ち遷つて人を食ふ。人を食ふ者は、因りて真虎と作る。人を食はざる者は、更に復化して人と為る。公牛氏は、韓人、淮南の人。牛は芻を食ふに因りて、之を芻拳と謂ふ。此に驗あり」「其の兄を殺す。掩は読みて奄と曰ふ。覘は視なり」とある。

○ 『捜神記』卷二に「魯の牛哀は疾を得、七日にして化して虎と為る。形態変易し、爪牙施し張る。其の兄戸を啓きて入るや、搏ちて之を食ふ。方に其の人たるや、其の將に虎と為るを知らざるなり。方に有虎たるや、其の常に人たるを知らざるなり」とある。

○ 『萬畢』（一〇九）に注のみが残存しているグループの一つとして「昔、公牛哀病七日、化而爲虎。其兄啓戸而入、虎搏而殺之。方其爲虎、不知其嘗爲人也。方其爲人、不知其且爲虎也」とある。

本条を『萬畢』の注と認定するにあたり葉德輝は『太平御覽』八九一が『萬畢』の引用に挟んで「又曰」として本条を引用していることを根拠としている。

○ 「化」の思想（イレギュラー）の系統。「化」は定期的におこるレギュラーなものと、不定期におこるイレギュラーなものに分類できる。時令の中に組み込まれているもの（「17」～「22」など）は、当時にあつてはレギュラーなものとして認定されていたことがわかる。

【2】

【原文】

月虚而魚腦滅。（天文訓）

【書き下し】

月虚^かけて魚腦^か①滅^ず。

【注】

① 高誘注に従い「脳肉」と解し、「3」「16」との関連から、瘦せるの意味で解しておく。

【現代語訳】

月が欠けると魚が痩せる。

【補】

○ 高誘注に「減は少なり。脳肉の満たざるなり。陰気に応ずるを言ふなり」とある。

○ 月の満ち欠けに連動するものの提示として、『呂氏春秋』季秋紀・精通に「月望なれば則ち蚌蛤実たり。群陰の盈なればなり。月

晦なれば則ち蚌蛤虚たり。群陰の虧くればなり」とある。また『大戴礼』易本命に「蚌蛤亀珠は月と盛虚す」とある。

○ [3] [16] と同質である。

○ 博物系である。或は「二日月・新月の頃の魚は瘦せているので捕るな」という生活の知恵系。

[3]

【原文】

月死而羸蠃。 (天文訓)

【書き下し】

月死して羸蠃^①。 羸す^②。

【注】

① ハマグリ。

② 肉が落ちる。

【現代語訳】

新月になるとハマグリの肉が痩せる。

【補】

○ 高誘注に「羸は読みて物のごとし。醜炒の醜なり」とある。

○ 月の満ち欠けに連動するものの提示として、『呂氏春秋』季秋紀・精通に「月望なれば則ち蚌蛤実たり。群陰の盈なればなり。月晦なれば則ち蚌蛤虚たり。群陰の虧くればなり」とある。また『大戴礼』易本命に「蚌蛤亀珠は月と盛虚す」とある。

○ [2] [16] と同質である。

○ 博物系である。或はハマグリを食用と考えれば「新月の時はハマ

グリを捕るな」という生活の知恵系となる。

[4]

【原文】

陽燧見日、則然而爲火。 (天文訓)

【書き下し】

陽燧^①は日を見れば、則ち燃えて火を爲す。

【注】

① 凹状の金属製の盤。中央に艾をおいて太陽に向けると火を生じる。

【現代語訳】

陽燧は太陽（の光）にあてると燃えて火を生じる。

【補】

○ 高誘注に「陽燧は金なり。金杯の縁なき者を取りて、熟摩して熱くならしむ。日の中する時、以て日下に当て、艾を以て之を承くれば、則ち燃えて火を得るなり」とある。

○ [27] [29] に同じ。

○ 博物系である。

[5]

【原文】

方諸見月、則津而爲水。 (天文訓)

【書き下し】

方諸^①は月を見れば、則ち津^{つゝ}ひて水を爲す。

【注】

① ハマグリノ殻でできた盤。満月の時に月に向ければ水を生じる。

【現代語訳】

方諸は月（の光）にあてると、湿って水を生じる。

【補】

○ 高誘注に「方諸は陰燧、大蛤なり。熟磨して熱くならしむ。月の盛なる時、以て月下に向くれば、則ち水を生ず。銅盤を以て之を受く。水を下すこと教滴。先師匠の説然り」とある。また許慎『華嚴経音義』二注に「方諸は五石の精もて圓器を作り杯に似す。月を迎へば、則ち水を得るなり」、また『太平廣記』一六一に「方諸は五石の精、圓器を作りて杯巧に似せて月を向へば、則ち水を得るなり」、また『太平御覽』四・『事類賦』月部に「諸は珠なり、方は石なり。銅盤を以て之を受くれば、水数升を下す」とある。

○ 『萬畢』（四）に「方諸取水」とある。本条を『萬畢』と認定するにあたり葉德輝は『太平御覽』五八が「萬畢術曰」として引用していることを根拠としている。

○ 「28」に同じ。

○ 博物系である。

【6】

【原文】

虎嘯而谷風至。（天文訓）

【書き下し】

虎嘯けば谷風〔6〕至る。

【注】

① 単に谷に吹く風とも、東風とも解釈できる。後者の場合、万物を成長させる風の意となる。

【現代語訳】

虎が吠えたと谷風（東風）がおこる。

【補】

○ 高誘注に「虎は土物なり。風は木風なり。木は土より生ず。故に虎嘯きて谷風至る」とある。また『太平御覽』九に「高誘注曰」として「虎は陽獸なり。風と類を同じくす」とある。許慎注『文選』劉孝標「広絶交論」注・『太平御覽』九二九・『事類賦』風部に「虎は陰中陽の獸。風と類を同じくす」とある。

○ 『萬畢』（七七）に「虎嘯則谷風生」とある。『太平御覽』八九一・九二九、『事類賦』虎部が「萬畢曰」として引く。

○ 同類相感を示す博物系。或は東風の到来を予知する占術系。谷風により虎を避けるという生活の知恵系。

【7】

【原文】

龍舉而景雲屬。（天文訓）

【書き下し】

龍舉がれば景雲〔7〕属す。

【注】

① 瑞祥としての雲。瑞雲。

【現代語訳】

龍が天に上ると瑞雲があつまる。

【補】

○ 高誘注に「龍は水物なり。雲は水を生ず。故に龍挙がりて景雲属す。属は会なり」とある。許慎注『太平御覽』九二九に「龍は陽中陰の虫。雲と類を同じくす」とある。

○ 吉兆を示す占術系。

[8]

【原文】

麒麟鬪而日月食。（天文訓）

【書き下し】

麒麟①鬪へば日月食す。

【注】

① 麒麟同士が戦うともとれるが、ここでは麒を雄、麟を雌とする解釈に従っておく。

【現代語訳】

麒麟が（雌雄で）鬪えば、日蝕・月蝕がおこる。

【補】

○ 許慎注『初学記』一・『事類賦』日部に「麒麟は大角の獣。故に日月と相動く」とある。

○ 許慎注に従えば同類相感となる。

○ 凶兆を示す占術系。

[9]

【原文】

鯨魚死而彗星出。（天文訓）

【書き下し】

鯨魚死せば彗星出づ。

【現代語訳】

鯨が死ねば彗星があらわれる。

【補】

○ 許慎注『一切経音義』一九・『太平御覽』九三八に「鯨は海中の魚の王なり」とある。また『初学記』一に「彗は旧を除き新を布くなり」とある。

○ 同類相感。凶兆を示す占術系。

○ 「26」に同じ。

[10]

【原文】

蠶珥絲而商弦絶。（天文訓）

【書き下し】

蠶絲を珥^はげば商弦①絶ゆ。

【注】

① 商は音を清濁高下によって分類した五音（宮・商・角・徵・羽）の一つ。五声とも言う。

【現代語訳】

蚕が糸を吐きはじめると、商音の弦が切れる。

【補】

○ 高誘注に「蠶老絲成り、中より外に徹り、之を視るに金精珥の如く、表裏見ゆ。故に珥絲と曰ふ。一に絲を口に弄すと曰ふ。高音は清。弦は細くして急なり。故に先に絶つなり」とある。

○ 博物系。もしくは蚕が糸を吐き繭を作り始める頃には、商音の弦が切れやすいという生活の知恵系。

○ 「24」に同じ。

【11】

【原文】

賁星墜而勃海決。(天文訓)

【書き下し】

賁星「①」墜ちて勃海「②」決す。

【注】

① 流星。賁は走るの意。

② 渤海に同じ。

【現代語訳】

流星が落ちると渤海が溢れる。

【補】

○ 高誘注に「賁星は客星(常には見えない星)なり。又孛星に作る。

墜隕なり。勃は大なり。決は溢るるなり」とある。許慎注『開元

占経』七四)に「奔星は流星なり」とある。

○ 博物系であろうか。本条の記述のみでは判然としない。

【12】

【原文】

磁石上飛。(墜形訓)

【書き下し】

磁石は上に飛ぶ。

【現代語訳】

磁石はものを(ひきつけ)上げる。

【補】

○ 『萬畢』(一一)(二五)にも磁石に関する記述は見える。また、磁石を用いた術については『史記』に武帝に取り入った方士鸞大の記述もある。

○ 磁石の同極同士が反発し合うことに基づく博物系・科学系である。

【13】

【原文】

雲母來水。(墜形訓)

【書き下し】

雲母は水を来す。

【現代語訳】

雲母は水をもたらす。

【補】

○ 『萬畢』(二三)にも雲母に関する記述はあるが、傷を負わないための呪術的効能に関するものである。

○ 雲母は五行の金に属するから、単純に「金生水」を述べた博物系

とも解せるが、雲母は仙薬の材料でもあることから、ここも雲母が生じた水が仙薬的な効能を持つ薬物系と考える方が自然である。なお、雲母を仙薬の材料として詳細に語るものに『抱朴子』金丹・仙薬・黄白の諸篇がある。ただし、ここでは雲母を煎じたり粉末にしたりする例のみである。

[14]

【原文】

土龍致雨。（墜形訓）

【書き下し】

土龍〔①〕は雨を致す。

【注】

① 雨乞いのための土製の龍。

【現代語訳】

土龍は雨をもたらす。

【補】

○ 高誘注に「湯は早に遭へば、土龍を作りて以て龍に象じる。雲は龍に従ふが故に雨を致すなり」とある。許慎注（『初学記』一・『白帖』二・『太平御覽』一一・『歳華紀麗』二注）に「湯は早に遭へば、土龍を作りて以て龍の雲に従ふに象じるなり」とある。陶方埒はこの部分は許慎注が混入しているのではないかとする。

○ 雨乞いに関する呪術系。

[15]

【原文】

燕雁代飛。（墜形訓）

【書き下し】

燕雁は代りて飛ぶ。

【現代語訳】

燕と鴈は（春と秋に）代わる代わる飛来する。

【補】

○ 高誘注に「燕は玄鳥なり。春分にして来る。鴈は春分にして北し、漠中に詣るなり。燕は秋分にして去り、鴈は秋分にして南し、彭蓋に詣るなり。故に代りて飛ぶと曰ふ。代は更なり」とある。

○ 博物系。

[16]

【原文】

蛤蟹珠龜、與月盛衰。（墜形訓）

【書き下し】

蛤蟹珠龜は、月に与ひて盛衰〔①〕す。

【注】

① ここでは、蛤・蟹・龜については肉付きのことを、珠についてはつづの大小を言ったものと解しておく。

【現代語訳】

蛤・蟹・真珠・龜は、月の満ち欠けによって肥えたり痩せたりする。

【補】

- 高誘注に「与は猶ほ随のごときなり」とある。
- 『呂氏春秋』季秋紀・精通に「月望なれば則ち蚌蛤 実たり。群陰の盈なればなり。月晦なれば則ち蚌蛤 虚たり。群陰の虧くればなり」とある。また『大戴礼』易本命に「蚌蛤龜珠は月と盛虚す」とある。

- 同類相感。收穫時期を示す生活の知恵系。
- 「2」「3」と同質である。

〔17〕

【原文】

立冬燕雀入海化爲蛤。(墜形訓)

【書き下し】

立冬に燕雀は海に入り化して蛤と爲る。

【現代語訳】

立冬の日、燕や雀は海に入って蛤に変化する。

【補】

- 「21」と同質である。
- 化の思想(レギュラー)。博物系である。
- 本条に関連して『五雜俎』卷二(天部二)に記述があるので提示しておく。「雀は大水に入りて蛤と爲るは、北方の人常に之を習ひ見る。季秋に至る毎に、千百羣を爲して飛噪して水濱に至り、簸蕩旋舞すること数四にして、而る後に入る。其の蛤と爲るか否かは、得て知るべからざるなり。然れども冬月に何ぞ嘗て雀なか

らんや。或は変ずる所の者は又是れ一種のみなるか。或は亦尽くは変ぜざる者にして、鷹の鳩に化し、雉の蜃に化するの類の如きものあるか」と。

〔18〕

【原文】

(仲春)鷹化爲鳩。(時則訓)

【書き下し】

(仲春)鷹化して鳩と爲る。

【現代語訳】

鷹が鳩に変化する。

【補】

- 『呂氏春秋』仲春紀・仲春、『礼記』月令(仲春)、『大戴記』夏小正(二月)にも同文が見える。また『礼記』王制には「鳩化して鷹と爲る」とある。
- 高誘注に「鷹化して鳩と爲るは、喙の正直にして、鷲とらへ搏つかたざればなり。鳩は布穀と謂ふなり」とある。また『礼記』鄭玄注には「鳩は穀を搏つかつ」とある。
- 『搜神記』卷二二に「春分の日に鷹変じて鳩と爲り、秋分の日に鳩変じて鷹と爲るは、時の化せしむるなり」とある。
- 化の思想(レギュラー)。博物系である。

【19】

【原文】

（季春）田鼠化爲鴛。（時則訓）

【書き下し】

（季春）田鼠〔①〕化して鴛〔②〕と爲る。

【注】

① モグラ・イタチ・ネズミの類。

② ウズラ。

【現代語訳】

モグラ・イタチ・ネズミの類がウズラに変化する。

【補】

○ 『呂氏春秋』季春紀・季春、『礼記』月令（季春）、『大戴記』夏小正（三月）に同文が見える。

○ 高誘注に「田鼠はモグラ・イタチ・鼠なり。鴛は鶉なり。青・徐には之を鶉と謂ひ、幽・冀には之を鶉と謂ふなり」とある。

○ 化の思想（レギュラー）。博物系である。

【20】

【原文】

（季夏）腐草化爲蚘。（時則訓）

【書き下し】

（季夏）腐草化して蚘〔①〕と爲る。

【注】

① ヤスデ。

【現代語訳】

腐った草がヤスデに変化する。

【補】

○ 『呂氏春秋』季春紀・季春に同文が見える。『礼記』月令（季春）に「腐草 蚘と爲る」とある。

○ 高誘注に「蚘は馬蛇ヤスデなり。幽・冀には之を秦渠と謂ふ。蚘は読みて奚徑の徑なり」とある。

○ 『搜神記』卷二二に「腐草の蚘と爲る。……此れ無知より化して有知と爲る。氣の易はるなり」とある。

○ 化の思想（レギュラー）。博物系である。

【21】

【原文】

（季秋）賓雀入大水爲蛤。（時則訓）

【書き下し】

（季秋）賓雀〔①〕大水に入りて蛤と爲る。

【注】

① 高誘注により人家の軒下に巢を作った雀と解しておく。なお『礼記』月令は「賓」を上文の「鴻鷹来」に接続させており、「鴻鷹来 賓し、爵 大水に入りて蛤と爲る」という読みも成立するが、ここでは高誘注に従う。

【現代語訳】

軒に住む雀が海に入ってハマグリに変化する。

【補】

○『呂氏春秋』季秋紀・季秋、『礼記』月令（季秋）、『大戴礼記』

夏小正（九月）に「賓爵 大水に入りて蛤と為る」とある。

○高誘注に「賓雀は老雀なり。人の堂宇の間に栖宿し、賓客の如き者なり。故に之を賓と謂ふ。大水は海水なり。伝に曰く「雀海に入りて蛤と為る」と」とある。許慎注『太平御覽』九四二に「雀は屋に依る。雀は本飛鳥なり。陽の下るに随ひて蔵す。故に蛤と為る」とある。

○『搜神記』卷二二に「百年の雀は海に入りて蛤と為る。……数の至らしむるなり」とある。

○化の思想（レギュラー）。博物系である。

○「17」と同質である。

○本条に関連して、『五雜俎』卷九（物部二）に記述があるので提示しておく。『淮南子』に「季秋の月、鷹 来賓す。雀 大水に入りて蛤と為る」と。来賓とは、初秋に先に来る者を主と為し、而して季秋に至る者を賓と為すなり。許叔重の解は「鷹来る」を以て句と為して曰く「賓雀は老雀なり。人家に棲宿すること、賓客の如く然り」と。崔豹『古今注』も亦云ふ「雀一名は嘉賓」と。必ず考ふる所あり。今此に記す」と。

〔22〕

【原文】

（孟冬）雉入大水爲蜃。（時則訓）

【書き下し】

（孟冬）雉 大水〔①〕に入りて蜃〔②〕と為る。

【注】

① 高誘注・『礼記』鄭玄注・『大戴礼記』夏小正に従って、淮水と解しておく。

② 『本草綱目』には蜃を龍の一種とする説も見られるが、ここでは『礼記』月令（孟冬）の鄭玄注「大蛤を蜃と曰ふ」に従ってオオハマグリと解しておく。

【現代語訳】

キジが淮水に入つてオオハマグリに変化する。

【補】

○『呂氏春秋』孟冬紀・孟冬、『礼記』月令（孟冬）に同文が見える。『大戴礼記』夏小正（二〇月）に「玄雉 淮に入りて蜃と為る」とある。

○高誘注に「蜃は蛤なり。大水は淮なり。伝に曰く「雉 淮に入りて蜃と為る」と」とある。

○『搜神記』卷二二に「千歳の雉は海に入りて蜃と為る。……数の至らしむるなり」とある。

○化の思想（レギュラー）。博物系である。

○本条の「蜃」の解釈に関して、『五雜俎』卷九（物部二）に記述があるので提示しておく。『爾雅』に曰く「蜃の小なる者は球なり」と。是れ蜃を以て蚌の属と為す。羅願『爾雅翼』卷三「蜃は大蛤なり」と。故に海中の車螯も亦之を蜃と謂ふ者あり。然れども古人は蛟・蜃を同称すること蚌・蛤の属のごとし。豈に能く変化して人に害を為すや。陸佃の『埤雅』に云ふ「蜃の形は蛇の如くにして大なり。腰より以下は鱗尽く逆だつ」と。一に曰く「状

は螭龍に似て、耳あり角あり。気を嘘せば樓台を成す」と。然らば則ち蟹に二種ありて、海市蟹樓、及び許遜の誅せし所の者は、必ず球蛤に非ざること明らかなり。又雉は大水に入りて蟹と為るとは、雉は本蛇の化する所にして、晋の武庫の中より雉飛びて蛇を得とは是れなり。則ち其の水に入りて蟹と為るとは、亦其の類に従ふのみ。而るに羅氏の以て蛤と為すは、俱に誤りなり」と。

〔23〕

【原文】

東風至而酒湛溢。（覽冥訓）

【書き下し】

東風〔①〕至りて酒湛〔②〕溢る。

【注】

① 春風。

② 清酒の下に沈殿する糟。

【現代語訳】

春風が吹くと酒が発酵する。

【補】

○ 高誘注に「東風は木風なり。酒湛は清酒なり。米物は下湛す。故に湛と曰ふ。木の味は酸。酸は風の酒に入るが故に、酒酢し。而して湛なる者は沸溢す。物類の相感するなり」とある。また『太平御覽』九所引高誘注「東風は大風なり。酒沈は清酌酒なり。米物は下沈す。木の味は酸。酸は風の酒に入るが故に、酢し。而して沈する者は沸す。蓋し物類の相感するなり」とある。許慎注『太

平広記』一九一・『事類賦』風部）に「東方は震方なり。酒汎は清酒なり。木の味は酸。相感するが故なり」とある。

○ 同類相感。酒作りに関する生活の知恵系。

〔24〕

【原文】

蠶吐絲而商絃絶。（覽冥訓）

【書き下し】

蠶絲を吐きて商絃絶ゆ。

【現代語訳】

蚕が糸を吐きはじめると、商音の弦が切れる。

【補】

○ 高誘注に「老蠶は絲を口より上下す。故に絲を吐くと曰ふ。新たに絲の出づるが故に、絲脆し。商は五音に於て最も細くして急なるが故に絶つなり。吐は或は珥に作る。蠶の老いし時、絲は身中に在り。正黄にして、見を外に達す。珥の如きなり。商は西方金の音なり。蠶は午火なり。火壮なれば金困ず。商に応ずるのみ。或は新故の相感する者あるなり」とある。

○ 「10」に同じ。

○ 博物系。もしくは蚕が糸を吐き繭を作り始める頃には、商音の弦が切れやすいという生活の知恵系。

[25]

【原文】

畫随灰而月運闕。(覽冥訓)

【書き下し】

画灰に随ひて「①」月運「②」闕く。

【注】

① 高誘注に従って、蘆の灰を窓の下の月光が照らすところまいて、そこに円を描き、その一部を消し去って円を開けば、の意に解しておく。

② 月暈に同じ。月の周りにできる輪状の雲気。

【現代語訳】

(窓の下の月光が照らす所にまいた) 灰に描いた円(を開く)に従って月暈も欠ける。

【補】

○ 高誘注に「運は読みて運圍の圍なり。運は軍なり。將に軍事に相い圍み守ることあらんとすれば、則ち月運の出でるなり。蘆草の灰を以て牖下の月光中に随ひ、圍画して、其の一面を缺けば、則ち月運も亦上に缺くるなり」とある。

○ 月暈が出た際に、それを消すための呪術。高誘注によれば、月暈は城(都市)が包圍される凶兆であるので、それを回避するためということになる。凶兆を消滅させるための呪術系。

[26]

【原文】

鯨魚死而彗星出。(覽冥訓)

【書き下し】

鯨魚死せば彗星出づ。

【現代語訳】

鯨が死ねば彗星があらわれる。

【補】

○ 高誘注に「鯨魚は大魚。蓋し長數里。海辺に死す。魚の身は賤しきなり。彗星為に変異し、人にて之れ害あるなり。類の相動くなり」とある。

○ 同類相感。凶兆を示す占術系。

○ 「9」に同じ。

[27]

【原文】

夫陽燧取火於日。(覽冥訓)

【書き下し】

夫れ陽燧「①」は火を日に取る。

【注】

① 通常、この部分は王念孫の説に従って「陽」字を削除するが、「4」が「陽燧」に作るので従わない。

【現代語訳】

陽燧は太陽から火を取る。

【補】

- 「4」「29」に同じ。
- 博物系である。

[28]

【原文】

方諸取露於月。（覽冥訓）

【書き下し】

方諸は露を月に取る。

【現代語訳】

方諸は月から水を取る。

【補】

- 「27」「28」に対する高誘注に「水火は太極に従ひて来り、人の手中に在り。能く説き知る所に非ざるなり」とある。
- 『萬畢』（四）に「方諸取水」とある。本条を『萬畢』と認定するにあたり葉德輝は『太平御覽』五八が「萬畢術曰」として引用していることを根拠としている。
- 「5」に同じ。
- 博物系である。

[29]

【原文】

夫燧之取火於日。（覽冥訓）

【書き下し】

夫燧〔①〕は火を日に取る。

【注】

- ① 王念孫が「27」の注で「陽」字を削除するのは、ここに「夫燧」とあることによる。ここでは「夫燧」のままとし、「陽燧」の意で解釈しておく。

【現代語訳】

陽燧は太陽から火を取る。

【補】

- 「4」「27」に同じ。
- 博物系である。

[30]

【原文】

磁石之引鐵。（覽冥訓）

【書き下し】

磁石は鐵を引く。

【現代語訳】

磁石は鉄を引き寄せる。

【補】

- 「12」と同質。
- 博物系である。

[31]

【原文】

蟹之破漆。(覽冥訓)

【書き下し】

蟹は漆を破る〔①〕。

【注】

① 『本草綱目』卷四五・蟹に「弘景曰く、仙方に之を用う。漆を化して水と為す。之を服すれば長生す」とあり、また「頌に曰く、其の黄は能く漆を化して水と為す」とある。これに従う。

【現代語訳】

カニ(ミン)は漆を(水に)変化させる。

【補】

○ 博物系である。或は仙薬系、または漆かぶれを直す経験医学の薬物系。

[32]

【原文】

葵之郷日。(覽冥訓)

【書き下し】

葵ひまわりは日に郷むかふ。

【現代語訳】

ヒマワリ(の花)は太陽に向かう。

【補】

○ 博物系である。

[33]

【原文】

天雄・烏喙、藥之凶毒也、良醫以活人。(繆称訓)

【書き下し】

天雄・烏喙〔①〕は、薬の凶毒なるものなるも、良医は以て人を活かす。

【注】

① ともにトリカブトの一種。『廣雅』釋草に「一歳を莢子と為し、二歳を烏喙と為し、三歳を附子と為し、四歳を烏頭と為し、五歳を天雄と為す」とある。

【現代語訳】

天雄と烏喙は薬の中でも毒性の強いものだが、すぐれた医者はこちらを用いて患者を治す。

【補】

○ 天雄・烏喙を薬材とした記述が『萬畢』(三五・六六天雄)(一七烏喙)にある。

○ 経験医学に基づく薬物系である。